

平成 29 年度学生による授業評価にもとづく学長表彰

授業改善への取り組み

放射線技術科学科 武藤 裕衣

当方の過去 3 年の授業改善への取り組みを報告いたします。

まず、自身の「授業評価への基本姿勢」を 3 点掲げました。①学生（顧客）の立場で、より良い授業を実施するために、PDCA を回しつづける②授業評価結果は自身の人格を否定されているのではなく行動改善へのヒントと受け止める③サイレントマジョリティに意見を述べてもらう努力をする。

この上で、具体的な授業改善への取り組みを 3 つ紹介します。

1. 授業資料は、見やすく・早めに配信する（パワポ資料は A4_4 分割。カラー印刷可能となるよう PDF 配信。可能な限り数回分資料をまとめて配信する）。
2. 授業リフレクション結果を可能な限り全て学生に提示し、「できること」と「できないこと」を説明する（ただし、授業進度を遅らせないよう 15 回授業中 1 回～3 回程度のみ提示する）。
3. スマートフォンを利用した多人数同時参加型オンラインアプリを活用し、学生の理解度をみながら授業を進める。

臨床検査技師を目指す学生に (検査現場でのリアルな出来事を交えて)

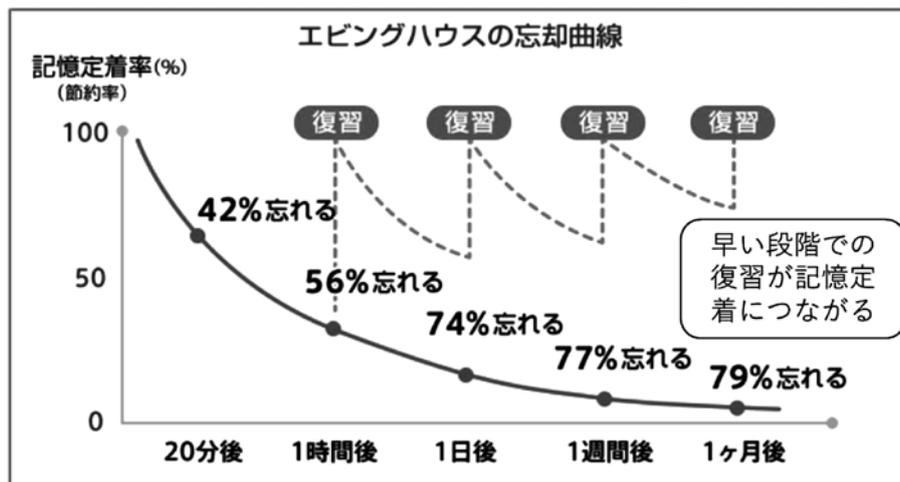
医療栄養学科 西岡 淳二

病院勤務の経験から、新卒入職者には「こうあってほしい」「これは出来てほしい」などの期待があり、それを目標に授業・実習を進めています。3 年次の実習では、それぞれの技術が検査現場で、どのような場面で、どのような患者に活かされるかを具体的な事例を交えて実習します。2 年次では、多くの専門科目を学びますが、そのほとんどを座学として学修します。学生たちはよく勉強しますが、多くの事を学修する必要があり、モチベーションを維持出来ず「記憶すること」に苦勞しています。そんな時、病院勤務での苦い経験や辛い体験を含めリアルなエピソードを紹介することで、学生達は「臨場感」を感じ、気を取り直して学習に取り組めるようです。加えて映画や TV ドラマで取り扱われる疾患を関連付けて授業・実習を進めることで興味を持って学習できるように思われます。小さな工夫ですが、学生達が、近い将来、「自分が臨床検査の現場で働く姿」をイメージできるような授業・実習を進めています。

ビジネスと同じように、教育でも ‘多くの情報量を経験させる’から‘選択と集中’へ

薬学科 藤川 隆彦

私は、教育研究会にて発表させていただくような機会をいただくまでに10年以上の年月がかかってしまいました。当初は、薬学部2年生という早い段階から薬理学の多くの情報量を経験させてあげ、国家試験のことで不安や焦りを持ってしまう6年生になったときに、新薬やその作用機序を目にし、不安等を助長させないようにしてあげたいとの思いから、先を見越した授業に取り組んでいました。そのため、薬剤師国家試験が終わるたびに、年々新薬の情報量が増えていく講義資料となっていました。そのような中、授業評価内の改善要望等を見るたびに、赴任前の大学での考えにこだわり、本学の学生と授業を通して向き合っていないか考えるようになりました。そのことが、‘多くの情報量を経験させる’から‘選択と集中’へと変革する行動変容につながったと思います。そして、この変革によってこれまで培ってきた私自身の自信の喪失は、エビングハウスの忘却曲線の結果が心の支えになっているのかもしれない。



出典：Hermann Ebbinghausの忘却曲線(一部改変)